



Zephyros⁹⁴

オルセー美術館所蔵 印象派 ― 室内をめぐる物語

会期：2025 年 10 月 25 日〔土〕－2026 年 2 月 15 日〔日〕 | 会場：企画展示室



1



2



3

1 表紙(部分) エドガー・ドガ《家族の肖像(ベレリ家)》1858-1869年 油彩、カンヴァス オルセー美術館、パリ © photo: C2RMF / Thomas Clot | 2 ピエール＝オーギュスト・ルノワール《ピアノを弾く少女たち》1892年 油彩、カンヴァス オルセー美術館、パリ © Grand Palais Rmn (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF | 3 フレデリック・バジール《バジールのアトリエ、ラ・コンダミンヌ通り》1870年 油彩、カンヴァス オルセー美術館、パリ © Grand Palais Rmn (musée d'Orsay) / Gabriel de Carvalho / distributed by AMF



4



5



6

4 エドゥアール・マネ《エミール・ゾラ》
1868年 油彩、カンヴァス オルセー美術館、パリ
© GrandPalaisRmn (musée d'Orsay) /
Adrien Didierjean / distributed by AMF

5 クロード・モネ《アルバートマンの一隅》
1875年 油彩、カンヴァス オルセー美術館、パリ
© GrandPalaisRmn (musée d'Orsay) /
Martine Beck-Coppola / distributed by AMF

6 ギュスターヴ・カイユボット《ヒナギクの花壇》
1893年頃 油彩、カンヴァス 印象派美術館、ジヴェルニー
© Giverny, musée des impressionnistes /
photo: François Doury

印象派といえば、光や大気の移ろいまで捉えた風景画がまずは思い浮かぶのではないのでしょうか。たしかに印象派の主要画家たち——クロード・モネやピエール＝オーギュスト・ルノワール、アルフレッド・シスレー、フレデリック・バジールらは、早くも1860年代にはともに戸外制作に励んでおり、またカミーユ・ピサロやポール・セザンヌ、ベルト・モリゾらも、明るい陽光を浴びた風景と人物像とを調和させようと模索しました。彼らが生み出した風景画が、近代絵画に新しい方向性を示したことは間違いありません。

とはいえ主要メンバーのなかには、自然の光よりも人工の照明の効果を探求し、戸外での制作を疎んじたエドガー・ドガのような画家もいました。先輩画家のエドゥアール・マネ、そしてギュスターヴ・カイユボット、メアリー・カサット、またルノワールやモリゾに関しても、外光の効果に対する関心を仲間と共有しながら、室内の人物画を数多く描いています。屋内を舞台とした作品もまた、印象派芸術の重要な一側面をなしているのです。

なにより彼らの最初のグループ展が開かれたのは1874年のパリ。第二帝政期の大規模な都市計画を経たこのフランスの首都は、近代都市としての成熟期を迎えていました。その活気あふれる街中や、近郊における現代生活の情景は、「新しい絵画」を目指す先鋭的な画家たちにとって格好の画題となります。またこの時代は都市部を中心に、職場と住まいの分離が進み、公的な空間と私的な家庭との境界が明確になっていきました。すると慣れ親しんだ家の中は、せわしない外界からの「避難所」、あるいは憩いの場として重要性を増していきます。こうした身近な室内に対する熱いまなざしは、印象派世代にも多かれ少なかれ共有され、彼らは室内を舞台にさまざまな表現上の試みを行いました。

さらに印象派の画家たちは、室内「を」描くだけでなく、室内「のため」にも作品を手がけました。個人の住まいの壁を彩るための絵画（装飾画）や装飾品（オブジェ）の制作です。ジヴェルニーの睡蓮の池をモチーフに、晩年のモネが取り組んだ「大装飾画」——パリのオランジュリー美術館内に設置されている、あの「睡蓮の間」のコンセプトの原点にも、こうした室内装飾への関心があったといえるでしょう。

本展では、印象派および印象派と同時代の芸術家たちによる室内を舞台とした作品、また特定の室内の装飾を目的とした作品などを一堂に会することで、室内をめぐる彼らの関心のありかや表現上の挑戦を探っていきます。パリ・オルセー美術館の所蔵作品およそ70点を中心に、当館も含めた国内外の重要作品をくわえた約100点の絵画、素描、装飾美術が集う本展。「印象派と室内」というテーマで展示されたとき、印象派芸術はどのように見えてくるのか。ぜひ会場へ確かめにいらしてください。若きドガの傑作、高さが2メートルもある《家族の肖像（ベレッリ家）》（表紙の作品）も初来日します。

〔国立西洋美術館主任研究員 袴田紘代〕

物語る黒線たち

— デューラー「三大書物」の木版画

会期：2025年10月25日[土]－2026年2月15日[日]

会場：版画素描展示室



アルブレヒト・デューラー《龍と闘う聖ミカエル》『黙示録』12
1498年頃、1511年出版（ラテン語版再版、印刷本としての初版は1498年）木版

「彼が単色で、すなわち黒線を使って表現していないものがあるだろうか」——15世紀末から16世紀初頭にかけて、ドイツの地にあらたなルネサンス芸術を切り拓いたアルブレヒト・デューラー（1471-1528年）は、くしくも自身が亡くなる年に、かのロッテルダムのエラスムスによってそう評されました。デューラーの芸術の核にありつづけたのは、まさしくエラスムスが述べたとおり、色彩を欠いた「黒線」でした。彼はそれを前例のないやりかたで操ることで、あらゆる事物や現象、いや、不可視の対象や出来事をも描きだそうとした美術家だったのです。そして、複製媒体である版画の技術的な可能性や表現のポテンシャルをデューラーほどに鋭く見抜き、おのれの手で途方もなく大きく拡張した人物は、美術史上、ほかにいなかったといわなければなりません。黒いインクで印刷された無数の版画が、彼の特異にして実験的な造形思考を、空間的に隔てられた各地へ、また時間的な距離を超えて後世へと運び、さまざまなひとびとのもとに届けたのです。

本展では、ヨハネス・グーテンベルク以後の印刷革命の時代の、いわば視覚芸術における申し子であったともいうべきデューラーが、みずから出版人となって1511年に世に放った「三大書物」、つまり『黙示録』（ラテン語版再版）、『大受難伝』、『聖母伝』という、このうえなく劃期的だった活字印刷本の木版画群——物語連作の形式をとったもの——を一挙にすべて公開します。くわえて、デューラーがそれらを制作するにあたって刺戟を受けた先行世代の美術家たちの諸作品、および彼の「三大書物」の木版画に触発された後続世代の産物もあわせて展示し、造形思考の連鎖やその多元的なネットワークを浮かびあがらせませす。 [国立西洋美術館主任研究員 新藤淳]

フルーニング美術館・国立西洋美術館所蔵 フランドル聖人伝板絵——100年越しの“再会”

会期：2025年10月25日[土]－2026年5月10日[日]

会場：本館常設展示室

当館では、2017年度に旧松方コレクションの板絵《聖ヤコブ伝》を購入しました。この際の調査により、同作品は16世紀初頭のフランドルで制作され、現在ベルギー、ブリュージュのフルーニング美術館に所蔵される板絵と同一の祭壇装飾等に由来するものであることが確認されました。この再発見を機に企画された本展では、20世紀初頭にベルギーと日本に分かれた2点が、100年越しの「再会」を果たします。

また本展の開催にあたっては、美術史・自然科学の両サイドから2点について詳細な調査が行われました。美術史サイドにおいては、2点が同一の祭壇装飾等に属していたという仮説に基づき、それが他にどのような物語場面を含み、物理的にいかなる構造をもつものであったかについて考察しています。一方、自然科学サイドにおいては各種の光（電磁波）による下描きや絵具の調査結果などをもとに、使用されている材料や制作技法に焦点をあてて2点の類似性について考察します。特に下描きについては、高精細な画像を大きなモニターで映し出し、下描き段階でどのような変更がなされたかがわかるように紹介します。

本展では、このような2点をめぐる最新の調査結果をご紹介しますとともに、国内外の研究者とともに編纂した研究論文集（英文のみ）を会期中に出版します。

[国立西洋美術館特定研究員 高嶋美穂、同主任研究員 中田明日佳]



作者不詳
《聖ヤコブおよび聖ヨハネ伝の諸場面》
1525年 油彩、板
フルーニング美術館、ブリュージュ
© Photo: Cedric Verhelst /
Musea Brugge



作者不詳《聖ヤコブ伝》
油彩、板
国立西洋美術館
旧松方コレクション

2024 年度新規収蔵作品より

アントン・ラファエル・メンクス
《エジプト逃避上の休息》

1767年頃 油彩、板 106 x 83.4cm P.2024-0006



これは、18世紀後半の新古典主義を代表するドイツ人画家、アントン・ラファエル・メンクス(1728-1779年)による作品です。彼はローマで活躍し名声を確立したのち、1761年からスペイン国王カルロス3世の宮廷画家としてスペインに渡りますが、本作は同国滞在中に描かれた作品です。主題は、イエスを授かったばかりのマリアとヨセフがヘロデ王による新生児の虐殺から逃れるため、エジプトに渡る途中で休憩をとる、「エジプト逃避上の休息」です。これは、私的な礼拝や祈念のための聖家族を表した主題として、中世末期以降、高い人気を誇りました。

聖母はサンダルをはいて木陰の地べたに腰掛け、その膝の上で幼児キリストをあやしており、新生児の無垢なまなざしと、母の愛情に満ちた優しい眼差しが印象的です。地面に直接座る聖母の図像は、「謙譲の聖母」として知られる伝統的なタイプに基づきます。メンクスはここで、当時マドリッドに所在したラファエロによる同じ図像型式による名作《アルバの聖母》(現ワシントン・ナショナル・ギャラリー)を参照している可能性が指摘されます。いっぽうで、幼児キリストが白い包み着をすべて解かれて全裸で表され、かつ両手を伸ばしているのは、彼を将来待ち受ける磔刑という宿命への言及と考えられます。

過去の先例に基づきながら堅固な線描と美しい色彩を組み合わせ制作されている点や、人物のやや感傷的な風貌表現などには、この画家らしい優れた特徴を見てとることができるでしょう。本作は2015年のアンゲリカ・カウフマン《パリスを戦場へと誘うヘクトール》以来、久々の収蔵となる18世紀絵画です。2025年6月末の展示替え以降、本館にて展示中です。

[国立西洋美術館主任研究員 川瀬佑介]

冬季限定！キュレーターズ・ボイス2025

本年も「美術館でクリスマス」を行います

2024年度より実施期間を拡大してさまざまなプログラムをお届けしている「美術館でクリスマス」、今年度は11月26日[水]より年末までの約1か月間で開催いたします。コンサート企画、ボランティア・スタッフによる気軽なトークプログラムなどが目白押し。期間中は館内にクリスマスツリーも登場し、冬のひとときを彩ります。

そのなかでも最もはやくみなさまのお手元でご覧いただけるものが「冬季限定！キュレーターズ・ボイス2025」です。常設展ゾーン内で展示している作品を中心に当館研究員が自らお話しする音声ガイドシリーズで、昨年度好評をいただいた企画の第2弾となります。特集展示Collection in FOCUSや本年初展示となる作品も登場予定。ふだんはなかなか多くをお伝えできていない研究員の日ごろの研究の一端に触れていただけるほか、まさに今だからこそ楽しめる常設展の魅力を感じていただける内容を目指しています。



本コンテンツは、みなさまのスマートフォンから気軽にアクセスいただけます。準備が整い次第、当館ウェブサイトにて詳細をご案内いたしますので、どうぞお楽しみに。

[国立西洋美術館研究員 秋田美緒、同特定研究員 風戸美伶]

BABYといっしょに ゆったりDAY

0歳からの美術館

当館では、昨年「ゆったりBABY DAY」という未就学児連れのお客様限定のプログラムを初開催いたしました。このプログラムは小さなお子様連れのお客様も緊張感なく美術館での鑑賞体験を楽しんでいただくことを目的として企画しているもので、今年度は2025年12月15日[月]と2026年1月26日[月]に開催を予定しています。昨年同様、休館日に特別開館し、入場人数を絞って混雑なく鑑賞いただける環境をご提供します。また、今回の新たな取り組みとして、休憩室として開放するCAFÉ すいれんでの絵本朗読会も行います。朗読会でお子様と一緒にリラックスしてから展示をご覧になるのもおすすめです。

今年はプログラム名を少し変更していますが、この名称には、お子様だけでなく、保護者の皆様が「ゆったり」できる一日にしてほしいという願いも込めています。昨年の開催時にいただいた様々な反応から、小さなお子様連れのお客様が感じている美術館への来館に対するハードルの高さが想像以上であることを改めて実感し、名称にその思いを込めました。周りの視線をできるだけ気にすることなく、作品を通じたお子様とのコミュニケーションの場をもっていただく機会としていただければ幸いです。[国立西洋美術館経営企画・広報渉外室 隈部理香子]



[CAFÉ すいれん]

営業時間：10:00-17:30（食事11:00-16:45L.O. | 喫茶10:00-17:15L.O.）／金・土曜日10:00-20:00（食事11:00-19:10L.O. | 喫茶10:00-19:30L.O.）

[ミュージアムショップ]

モネの4作品「睡蓮」「黄色いアイリス」「ウォータールー橋、ロンドン」「チャーリング・クロス橋、ロンドン」をプリントしたセラミックス製のマグネットです。

作品のイメージを生かし、正方形と長方形サイズで展開しています。モネの絵画の色合い、空気に溶け込むような機関車の煙や、水の色に移り変わりなど細部を感じ取っていただけるよう仕上げました。絵画のように楽しむマグネットです。

素材は製造工程において二酸化炭素を吸収して固まるセラミックス（CALXCERUM®）。さらに製造時に排出される二酸化炭素を再び原料に活用するサイクルが実現し、従来の陶磁器に比べ、CO₂排出量を削減できます。貝殻や珊瑚と同じ炭酸カルシウムを主成分とし、接着剤やパルプ、プラスチックは含まれておらず、環境と調和します。

左上から時計回りに、

- 1 長方形サイズ3種「黄色いアイリス」「ウォータールー橋、ロンドン」「チャーリング・クロス橋、ロンドン」各1,100円（税込）
- 2 正方形サイズ3種「睡蓮」から抜き出したA、B、Cの3パターン 各880円（税込）



1



2



個包装されており、プレゼントにもおすすめです

オンラインショップ
https://www.nmwatokyo-shop.org



ミュージアムショップ公式Instagram
@nmwatokyo_shop



展示カレンダー [企画展示／常設展示] 2025年9月－2026年2月

9月 [Sep.]	10月 [Oct.]	11月 [Nov.]	12月 [Dec.]	1月 [Jan.]	2月 [Feb.]
常設展					
	全館休館	全館休館			
[小企画展] ー10月5日[日] ピカソの人物画	10月6日[月]	10月23日[木]	[小企画展] 2025年10月25日[土]－2026年2月15日[日] 物語る黒線たちーデューラー「三大書物」の木版画		全館休館 2月16日[月] ↓ 3月27日[金]
[企画展] ー9月28日[日] スウェーデン国立美術館 素描コレクション展 ールネサンスからバロックまで	10月8日[水]	10月24日[金]	[小企画展] 2025年10月25日[土]－2026年5月10日[日] フルーニング美術館・国立西洋美術館所蔵 フランドル聖人伝板絵ー100年越しの“再会”		
			[企画展] 2025年10月25日[土]－2026年2月15日[日] オルセー美術館所蔵 印象派ー室内をめぐる物語		

[開館時間] 9:30-17:30（毎週金・土曜日 9:30-20:00）＊入室は閉室の30分前まで

[休館日] 月曜日（月曜日が祝日又は祝日の振替休日となる場合は開館し、翌平日休館）、展示替期間、年末年始、臨時休館日

[臨時開館・臨時休館等のお知らせ]

臨時開館：2025年9月22日[月]、2026年2月9日[月] | 臨時休館：10月23日[木]－24日[金]

展示替え休館：2025年10月6日[月]－8日[水]、2月16日[月]－3月27日[金]

年末年始休館：2025年12月28日[日]－2026年1月1日[木]

[常設展無料観覧日] 10月12日*、11月3日（文化の日）、11月9日*、12月14日*、1月11日*、2月8日*

（＊当館オフィシャルパートナー・川崎重工工業株式会社の提供による「Kawasaki Free Sunday」（原則毎月第2日曜日））

＊展覧会名、会期、展示内容等は変更の可能性があります。最新の情報は国立西洋美術館公式サイトをご確認ください。

[常設展]

国立西洋美術館は、松方コレクションが核となって1959年に設立された、西洋の美術作品を専門とする美術館です。中世から20世紀にかけての西洋絵画と、ロダンをはじめとするフランス近代彫刻などを本館、新館、前庭で年間を通じて展示しています。

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art

[東京・上野公園]

国立西洋美術館

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

公式サイト https://www.nmwa.go.jp/

お問い合わせ 050-5541-8600（ハローダイヤル）

[国立西洋美術館 SNS 公式アカウント]

X・Instagram・You Tube @NMWATokyo

Facebook @NationalMuseumofWesternArt

こちらから
バックナンバーを
読むことができます

